

寺田寅彦

日本楽器の名称



日本楽器の名称

楽器の歴史は非常に古いものである。そして、現在ある国民やある民族に固有であるらしく見えるものでも実際はかなり複雑な因果の網目を伝わって遠い外国の楽器と親族関係になっているものらしい。もつともこれは楽器に限らずあらゆる人間の文化の産物について共通な事であって言語風俗等いずれについても同様であるには相違ないが、原始的な器械的発明としての楽器などはそういう関係を知るに比較的都合のいいものと考えられる。

そういう考えから、素人しろうとの道楽半分に少しばかり調べてみた結果をこの昭和三年の初春のにぎわいまでに書いてみる。もちろん玄人筋くろうとすじの考証家には一笑の値もないものである。

(三味線) 三弦、三線、三皮前、三びせんなどいろいろの名がある。『嬉遊笑覧きゆうしやうらん』や『松屋三絃考まつのやさんげんこう』を見ただけでもたくさんな文献が並べ立ててあるが、いっこうに要領を得難い。永祿えいろくあるいは文祿年間ぶんろくに琉球から伝わった蛇皮線じゃびせんを日本人の手で作рикаえた、それがだんだんポピュラーになったものらしい。それからシナの楽器の

阮咸げんかんと三味線とが同一だとか、そうでないとかいう議論がある。また、元げんの時代のかの地の三弦一名コフジ、一名コフシ、一名クワフシ、一名コハシなど称するものと関係があるような、またないようなことも書いてある。またこのゲンカンげんかんは竹林七賢人の一人の名だとの説もある。

ところがちよつと妙なことには、このゲンカンの文字を今のシナ音で読むとジ、ヤンシ、エンとなるのである。またこのコハシあるいはコフジに相当するものと思われる類似の楽器の類似の名前がヨーロッパ、アジア、アフリ

カ、南洋のところどころに散在しているのが目につく。たとえばリュート類似の弦楽器として概括さるべきものに、トルコのコプズ、ルーマニアのコブサ、またコプズ、ロシヤ、ハンガリーへのコボズなどがある。それからシベリアの一地方でコムスというのは、ふくれた胴に皮が張ってあるが、弦は二本で五度に合わすとある。振るっているのはホツテントットの用いる三弦の弦楽器にガボウイというのがあり、ザンジバルの胡弓こきゆうにガブスというのがある。また一方では南洋セレベスにある金属弦ただ一本のカボシがある。それからまたアラビアの四弦の

胡弓にシエルシエンクというのがあるのも妙である。

(尺八) シナの洞簫どうしょう、昔の一節切ひとよぎり、尺八、この三

つが関係のある事は確實らしい。足利時代に禅僧が輸入したような話があるかと思うと、十四世紀にある親王様が輸入された説もある。そうかと思うと『源氏物語』や

『続世継ぞくよつぎ』などに尺八の名があり、さらに上宮太子じょうぐうたいしが

尺八を吹かれたという話がある、シナには唐あたりの古いところにもとにかく尺八の名がある。しかしそれらの名前に相応する品物がどこまで同一のものであったかはわからない。長さが一尺八寸あるいは八分だから尺八だ

というところのはいかにももつともらしいが、これには充分疑う余地がある。ある書に尺八を十二作つたが長さがいよいよあると書いてある。正倉院の尺八は一尺一寸以下八種あるそうである。事によるとこの尺八は音の高度を示すものかもしれぬ。

蘭領らんりょうインドの島にシグムバワという笛があり。サモアにシヴァオフエという竹笛がある。

ペルシアのした、笛にシヤクというのがあつた。またラツパ、むしろトロンボンの類でシヤグバツト（英）サクビユト（仏）サカブケ（西）なども事によると何か縁があ

るかもしれない。

ヒトヨギリは「一節切」ひとよぎりに相違ないだろうが、これがヒチリキの子音転換とも見られるのがおもしろい。またポーランドのピスチャルカと称するものは六孔の縦吹き、のした、笛であるが、この品物自身もその名前とともにヒチリキに類するのが不思議である。

南洋のソロモン群島中のある島に存する竹製の縦笛にププホルと称するのがある。長さ五五・四デシメートルとあるのを換算するとまさに一丈八尺強、恐ろしく長いものである。ただ穴が三つしかないらしい。このププホ

ルと『徒然草』のいわゆるボロボロとを並べて考えてみるとだれでもちよつと微笑を禁じ難いであろう。

(胡弓)こきゆう

シナのフキン。朝鮮のコクン。日本のコキユー。モハメダンのギゲ。古代フランスのギグ。今のドイツのガイゲ。アフリカのゴゲ。いずれも同一属の楽器としてこんな名前が並べ得られる。

これについて思い出すのは古いアツシリアのたてごと豎琴と正倉院にある箜篌くごとの類似である。クゴはシナ音クンフーでハーブと縁がある。アラビアの豎琴ジュンク。マライのゲンゴンと称する竹製の豎琴。シャムのコンヴオン。

朝鮮のグムンゴまたクムンコなどが連想される。

中央アフリカ北東コンゴのある地方の豎琴にクンデ
イまたはクンズというのがある。ここまで来ると騎虎きこの
勢いに乗じて、結局日本のコトをついでにこれと同列に
並べてみたくなるのである。

豎琴の最古のものはテーベの墓の壁画に描かれたもの
だそうで恐ろしく古いものらしい。アツシリアのものは
わずかに極東日本にその遠い子孫を残すに過ぎないと思
われていたが、同じようなものが東トルキスタンで発見
されたそうである（紀元一世紀ごろのもの）。これはは

なはだ意味の深い事実である。

昔はあらゆる弦楽器がハープという一つの名で呼ばれたらしいという説がある。そういう事を頭においてだんだんに上記のいろいろの弦楽器の名前をローマ字書きに直して平面的あるいは立体的に並列させてみるとこれらはほとんど連続的な一つの系列を作る。これはたぶん偶然であるかもしれない。しかし万一そうでないかもしれない。かりに偶然でないとしたところでそれはこれらの名が擬音的であるために生ずる自然の一致であるか、あるいは伝統因果的關係から来るのか、たぶん両方である

か、これはなかなか容易にはわかりにくい問題であろう。

笛の名でもニューギニアのムベイ。ニュージールランドのプー。マレイのプアン。ミンダナオのプアラ。マルケサスのプイフ。ビルマのプルエ。ピルウエ。スラヴのフバ。フィンランドのフィル。ラテンのピパ。などみんな擬音らしくもありまた関係があるらしくもある。オボーなどもこれと従いとこ兄弟である。

おもしろい事には全然ちがった楽器の名前が同じような音から成り立っている例のかなり多いことである。たとえば笛のピパに対して弦楽器のピパすなわちビワがあ

り、弦楽器のタンブールに対して太鼓のタンブールがあるような類である。

以上はただまるで夢のような話で結局これだけからはなんの結論も出て来ないのであるが、ともかくもこれだけの片かなの名前を並べて、のどかにながめていると一種不思議な気持ちになって来る。今まで自分たちとは全くなんのゆかりもないように思われていた遠い国々の民族が何かしら、全くのあかの他人でないような気がして来る。古い言葉の四海兄弟という文字の意味が急に新しい光を浴びて現われて来るのを感じる。

赤道へ行っても実際は地球儀にかいてあるような線はどこにも存在しない。地図の上ではちがった絵の具でくつきりと塗り分けられた二つの国の国境へ行つて見ても、杭くいが一本立ってるくらいのものである。人間のこしらえた境界線は大概その程度のものである。人間の歴史のある時期に地球上のある地点に発生した文化の産物は時間の経過とともに人為的のあらゆる障壁を無視して四方に拡散するのは当然である。永代橋えいたいばしから一樽たるの酒をこぼせば、その中の分子の少なくともある部分はいつかは、世界じゅうの海のいかなる果てまでも届くであろうよう

に、それと同じように、楽器でも言語でも、なんでも、
 不斷に「ディフュージョン拡散」を続けて来たものであると思われ
 る。ただ溶媒中における溶質分子の拡散と比べてはなは
 だしく幾重にも複雑な方則に支配されるであろうし、拡
 散する「物」のスタビリティ安定度が少ないために、事がらがいつそ
 う込み入って来るのである。

以上は畢竟一つの空想に過ぎない。ただ、近来わが国
 固有文化に関する研究が急激に盛んになって来たのに気
 がついて、愉快に感じると同時に自分も知らず知らずそ
 のすうせい趨勢に刺激されて、つい柄がらにない方面にまで空想の翼

を延ばしたくなつたようなわけである。杜撰ずさんな考証に対してもし識者の教えを受け縁ともならば大幸である。

（お断わり。楽器の名のかな書きに直し方に不穏当なのがあるかもしれない。どうかそのつもりで読んでもらいたい。）

（昭和三年一月、大阪朝日新聞）

日本文学電子図書館

日本楽器の名称

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行



日本文学電子図書館